

1月 浩々洞における浄土
—「共同体」による経文解釈に着目して

第3回 「浩々洞註」『仏説阿弥陀経』の註釈にみる“名号”について 下

はじめに

本講座(1月)では雑誌『精神界』に「浩々洞註」という共同体の名のりで公開された諸論稿から“浄土”に関連する言説に迫ることを目的として、第2回から『仏説阿弥陀経』の文言を注釈した論稿を取り上げている。

第2回では『仏説阿弥陀経』から阿弥陀仏の名の由縁が記された「讚 極楽浄土」—「正報」段から誌面上に“名号”についてどのような註釈をしていたのかを確かめた。第2回の講座では様々な質疑をいただいたが十分に応答できなかったため、まずは、その質疑を振り返りたい。その後第3回も引き続き『仏説阿弥陀経』の「念仏往生」段の文言を註釈した「浩々洞註」論稿を読んでいく。前回と同様、“名号”をキーワードとし「往生」の「因」・「果」についての註釈についてみていく。

質疑

- ・ 共同体の見解であるとは、具体的にどのような見解を示しているのか教えていただきたいと思っています。
- ・ 浩々洞洞註ですと、なぜ阿弥陀仏は救いの形として名号の形をとらないといけなかったのかがよくわかりませんでした。ご了解教えていただけますでしょうか。
- ・ 柏原祐義氏の解釈を拠り所とするのはどういった理由があるのでしょうか。

1 『仏説阿弥陀経』「勸念仏往生」段

1—1 「如来の名によれる再生」—基礎情報

- ・ 『精神界』第2巻第12号(明治35[1905]年)の「解釈」欄に収録。
- ・ 『仏説阿弥陀経』の経文解釈。『真宗聖典』、129頁下段(訓読)L4～L14に該当。
- ・ 『仏説阿弥陀経』の構造上、「正宗分」→「勸念仏往生」→「念仏往生」→「正因」・「正果」に該当。

(1)『精神界』第2巻第12号エピソード

①舍利弗、②若し善男子、善女人ありて、③阿弥陀仏を説くを聞いて、名号を執持すれば、若しは一日、若しは二日、若しは三日、若しは四日、若しは五日、若しは六日、若しは七日、一心にして乱れず。④其人、命終る時に臨むで、阿弥陀仏、諸の聖衆と其前に現在したまふ。⑤是人終る時、心顛倒せずして、即ち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得む。(『阿弥陀経』)

(「精神界」欄エピソード『精神界』第2巻第12号、1頁)

→上記下線部①から⑤に分割され、それぞれに註釈が加えられる。

1-2 『仏説阿弥陀経』「勸念仏往生」段「往生因」と「往生果」

(1)『仏説阿弥陀経』「勸念仏往生」段

①舍利弗、衆生聞者、應當發願願生彼国、所以者何。得与如是諸上善人 俱会一处。②舍利弗、不可以少善根福德因縁得生彼国。

舍利弗、若有善男子善女人、聞説阿弥陀仏、執持名号、若一日、若二日、若三日、若四日、若五日、若六日、若七日、一心不乱、③其人臨命終時、阿弥陀佛、与諸聖衆、現在其前。是人終時、心不顛倒、即得往生阿弥陀仏極楽国土。(下線部、引用者)

(『真宗聖典』、真宗大谷派宗務所出版部、1978年、129頁)

- ・下線部③は「發願」
- ・下線部②は「往生因」
- ・下線部③は「往生果」

(2)柏原祐義『浄土三部経講義』(明治45年)、無我山房

前に極楽浄土の依正二報を讚めたゝへて、衆生をして慕ふこゝろを起こしさしめられたから、こゝには端を改めて、この極楽浄土に生まれるべき念仏をすゝめられるのである。先づ初めに正しく念仏往生を説き、次にそれを証明して信仰を勧めらるゝ。正しく念仏往生を説かるゝ一段が三項に分かれる。第一項は發願である。[...]第二項は正因である。願を發して浄土に往生したいと思ふならば、念仏より外に往生の因はない。[...]第三項は正果である。右の念仏をつとめたものは、臨終に仏の來迎を受けて、浄土に迎へ取られると述べさせられた。

(『浄土三部経講義』、1912年、712頁)

→

- ・「往生因」→「正因」
- ・「往生果」→「正果」

1-3 『教行信証』に引用される『仏説阿弥陀経』「正因」の文言

(1)親鸞『教行信証』化身土巻

『阿弥陀経』に言わく、少善根福德の因縁をもって、かの国に生まるることを得べからず。阿弥陀仏を説くを聞いて名号を執持せよ、と。(下線部、引用者)

(『真宗聖典』、真宗大谷派宗務所出版部、1978年、348頁)

→下線部は『仏説阿弥陀経』の文言を引用したもの¹。

(2)山辺習学・赤沼智善『教行信証講義』(大正3年)、平楽寺書店

『阿弥陀経』に宣給はく、極楽は大乘善根界であるから、自力の定善散善等の少善根、少福德の因縁をもっては、往生することは出来ないのである。

然らば如何なる因縁によりて往生することが出来るのであるかと云へば、唯阿弥陀如来を説き奉ることを聞く丈である。即ち弥陀の名号の謂れを心に聞き開いて執持^アことである。

(『教行信証講義』真仏土・化身土巻、422頁)

→“名号”のいわれを聞き心にたもつことのみが“因”となり「彼の国」に往生するという解釈。

2「如来の名によれる再生」を読む

2-1 「往生因」の註釈

(1)浩々洞註「如来の名による再生」前文①

理想の国あり。されど徒に之を前に望むのみにして、進むで之に入ることなくむば、何の要かあらん。「汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らむ²」。永遠の古より一日もたえず我等の上に喚びたまふ此如来の声を聞く者、如何ぞ如来の国に走らざらむや。新に此国に生る、是れ人生の本義にあらずや。

されど門は其主人の鍵にあらずは開く能はじ。如来浄土の門は、如来の与へたまふ鍵によらずは、永劫開かるゝことあらざる也。徒らに門外に彳むで、塵寰の風雨に悩まされむよりは、何ぞで其鍵を求めざる。そは求むる時、たやすく与へらるべしと知らずや。(下線部、引用者)

『精神界』第2巻第12号、精神界発行所、1902年、19頁上～下段

(2) 浩々洞註「如来の名による再生」—舍利弗

月光は月光にあらずば認められじ。如来の大道は智慧の道也。されば又智慧にあらずば之を領得すること能はじ。釈尊が今此大道を宣説するに当つて、其教団に於ける最高の智者たる舍利弗を呼びたへる所以、正に此に在り。

¹ 『真宗聖典』、真宗大谷派宗務所出版部、1978年、129頁。

² 『愚禿鈔』下、『真宗聖典』、真宗大谷派宗務所出版部、455頁。下線した「汝を」箇所は『愚禿鈔』に本文になし。

『精神界』第2巻第12号、精神界発行所、1902年、19頁下段

(3) 浩々洞註「如来の名による再生」—若し善男子、善女人ありて

「悪性さらにやめがたし、こゝろは蛇蝎のごとくなり、修善も雑毒なる故に、虚仮の行となづけたる」(『述懐和讃』³⁾修善既に虚仮雑毒の行、人生何の処にか善あらむ。「何ぞ我を善しといふや、ひとりの外に善き者はなし」とは、決してサマリヤ、ガラリヤの村なる古説教者の空言に非る也。

されど善き者に順ふ、いかで善からざらむや。

「無慙無愧のこの身にて、まことの心はなけれども、弥陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまふ」。(『和讃』⁴⁾)

嗚呼、雑毒の男子、虚仮の女子は、今や「善男子」、「善女人」の栄光の名を与へられたる也。

『精神界』第2巻第12号、精神界発行所、1902年、19頁下～20頁上段

(4) 浩々洞註「如来の名によれる再生」—聞説阿弥陀仏、執持名号、若一日、若二日、若三日、若四日、若五日、若六日、若七日、一心不乱^①

如来浄土の門が開かるべき鍵は、何物なりや。曰く是れ学問にあらず、道徳にあらず、儀式にあらず、祈祷にあらず、読誦にあらず、称名にあらず、観念にあらず、識別にあらず、唯一信仰也。信仰とは、歡喜の謂にあらず、感謝の謂にあらず、懺悔にあらず、願求にあらず、唯如来の救済を覚得すること也。而して彼の歡喜や、感謝や、又懺悔願求等の意識は、唯此覚得より生じ来る作用のみ。さらば此救済の覚得は、如何にして成し得べきや。曰く如来の名を聞くに在り。聞くとは単に音響の感を起すを謂うに非ず。如来の名の意義を領得するを謂ふ也。

「聞といふは、如来のちかひの御名を信じとまうすなり」(『尊号真像銘文』)⁵

「名号をきくといふは、たゞおほやうにきくにあらず、善知識にあいて、波阿弥陀仏の六の字のいはれを、よくきゝひらきぬれば、報土に往生すべき他力信心の道理なりとこゝろえられたり」(『御文』)⁶

³ 『正像末和讃』「愚禿悲歎述懐」(『真宗聖典』、真宗大谷派宗務所出版部、1978年、508頁)

⁴ 『正像末和讃』「愚禿悲歎述懐」(『真宗聖典』、真宗大谷派宗務所出版部、1978年、509頁)

⁵ 『尊号真像銘文』本「『無量寿經』の銘文」(『真宗聖典』、真宗大谷派宗務所出版部、1978年、513頁)

⁶ 『御文』三帖目第六通(『真宗聖典』、真宗大谷派宗務所出版部、1978年、803頁)

(『精神界』第2巻第12号、20頁)

(5)浩々洞註「如来の名によれる再生」—聞説阿弥陀仏、執持名号、若一日、若二日、若三日、若四日、若五日、若六日、若七日、一心不乱②

さらば如来の名は、何の意義を有する。願くば茲に我等をして煩瑣の解答を為すを免れしめて、唯だ哲人の解明を聴かしめよ。光明寺の大師曰く、「唯観念仏衆生、摂取不捨、故名阿弥陀」と。嗚呼、是れ万古滅す可からざるの明灯也 (本誌第一巻の七『仏の御名』、第二巻の二『正信偈註』参照)。

されば南無阿弥陀仏といへる梵語を以て示されたる如来の名は、是れ実に摂め取りて捨てざる救済の義也。たのむとき、たすけたまふ絶対慈愛の謂也。寧ろ絶対慈愛其者也。何となれば如来は絶対慈愛を我等に領得せしめむがための唯一の方法として斯名を成就したまひたれば也。故に茲に如来の全体の至誠あり。如来の全体の大心ある。也。

されば如来の名を領得するは、如来の至誠を領得する也。

如来の名を聞いて、之を我心に執持するは、即ち如来の大心を執持する也。既に如来の至誠を領得し、如来の大心を執持す、我心乱れむとするも、いかで得むや。此乱れ易き我は、今や正に如来至誠の巖に立てる也。

動き易き梢頭に在る者の心は動かむ。されど動かざる巖に立てるを自覚せる我的心、いかで又動かむ。一心不乱、是れ即ち我が執持名号の以後に於ける生活なり。

「如来の名によれる再生」『精神界』第2巻第12号、20頁下～21頁上段

→「さらば如来の名は、何の意義を有する」として、善導大師の著作からその意義が記された文言を引用。御名の意義については『精神界』第1巻第7号「仏の御名」と第2巻第2号多田鼎「正信偈註」を参照のこととある。

(6)多田鼎「正信偈註」二

いかに如来の御徳はガンジスの河のいさごよりも多いとは申せ、この光明寿命の二つの御徳の外に脱するものではない。それ故、如来御自身の御徳の大本は、即ち此無量の寿命と無量の光明と二つである。而して如来御自身の御徳は、全く私共を救ひ上げむがために具へて下されたものである故、この二つの御徳は、即ち私共を救ひたまふ大悲の本である。

(『精神界』第2巻第2号、精神界発行所、1902年、21頁下段)

(7)親鸞『教行信証』化身土巻—「執持一心釈」

『経』に「執持」と言えり、また「一心」と言えり。「執」の言は心堅牢にして移転せざることを彰すなり、「持」の言は不散不失に名づくるなり。「一」の言は無二に名づくるの言なり、「心」の言は真実の名づくるなり。この『経』は、大乘修多羅の中の無問自説経なり。しかれば、如来、世に興出したまうゆえは「恒沙の諸仏の証護の正意」ただこれにあるなり。

(『真宗聖典』、真宗大谷派宗務所出版部、1978年、345頁)

・「執持一心釈」—山辺習学・赤沼智善『教行信証講義』

(8)山辺習学・赤沼智善『教行信証講義』(大正3[1914]年)、平楽寺書店

本経には「執持」と説き、亦「一心」というてある。執とは、心に堅く執りて、動転かないといふこと、持とは、よく持ちて散りみだれず、又失はぬといふことである。即ち執持とは、金剛の如く堅固なることである。「一心」の一は無二といふこと、心は真実といふこと。即ち二心なき誠実の心といふこと。この執持と一心とは、金剛の信心の換名である。

(『教行信証講義』真仏土・化身土巻、392頁)

→正因の箇所に説かれる「執持」・「一心」とは「金剛の信心」を言い換えたものであるとしている。

2-2 往生果の註釈

(1) 浩々洞註「如来の名によれる再生」—其人臨命終時、阿弥陀仏、與諸聖衆、現在其前

執持名号の刹那、我既に如来の至誠を領し、如来の大心を持せり。我等が死の門に臨む時、此至誠、此大心が我を棄つべしとは、是れ我等の思ひ得る所に非ず。何となれば如来の慈愛は絶対なれば也、無限なれば也、其時間上の連続に於いて、限界あるべきものにあらざれば也。

身未だ宗教に入らずして、而も我死を恐れずといふは、蓋し是れ大言自ら驕るを喜ぶ人、或は自ら欺く人、或は未だ死に想到せざるの人也。一たび死に想到す、誰か震慄せざる者ぞ。風雨荒き孤島の夜、いまはの床に悶え狂へる將軍を見ずや。

されども如来の名をうけたる人は、死を恐れざる人也。

否、彼は力弱し、過ぎ来れる多大の罪過を懐ひ、其ために彼を迎へむと待構へつゝある前程の暗黒を望みては、彼たるもの、亦或は恐れむ、而も彼は彼が前程の一面に、彼が進路として定られたる光明の大道を望む也。其大道に現はれて、彼を招きつゝある彼の慈父を見也。彼の勝友を見る也。彼たる者、恐れ悲める其底より、又喜び勇む也。

三河、衣が浦辺の古村に於ける少女、肺を病みて逝くや、其上に降り来れる光明の国をたゞえぬ。古の哲人が、この心光明、また何をか言はむと語りて、静に息たえたるに似たらずや。今の我等、この一少女にだも及ばざるあらば、慚多からずや。

(『精神界』第2巻第12号、精神界発行所、1902年、21頁上～下段)

(2) 浩々洞註「如来の名によれる再生」— 是人終時、心不顛倒、即得往生阿弥陀仏極楽国土

人は狂ひ叫ぶ死の門に、心静にほゞえむで去るは、尊からずや。人は悪魔の召喚を耳にし、苦惱の怪焰を望む臨終の門出に、祝福の樂を聞き、栄光の輝くを仰ぐば、喜ばしからずや。

如来の子に退墮なし、たゞ醇化あり、進歩あり。彼は其後に残すべき此世に於いてより、前に現はれ来れる彼世に於いて、自己の向上一層多きを見る也。死の門のこなたより、死の門のあなたに於いて、自己の覚了、益々加はり行くを認むる也。而して自己の幸福、自己の栄光、死の後に於て、一層多大なるを喜ぶ也。煩惱妄念、死の門にあれ狂ひて、時に狼狽周章するあるも、其下より此希望と此歡喜とに動かされて、いさましく進み行く此如来の子、嗚呼是れ正に我等の理想也。

(『精神界』第2巻第12号、精神界発行所、1902年、21頁下～22頁上段)

→(1)・(2)では往生に臨終が強調されている。これは『仏説阿弥陀經』の經文を注釈したものであるからだろう。

[参考文献]

- ・柏原祐義『浄土三部經講義』、無我山房、1912年
- ・山辺習学・赤沼智善『教行信証講義』平楽寺書店、1914年、
- ・伊東慧明『阿弥陀經に聞く』、教育新潮社、1964年